(10) 小松天満宮と梯川

THE KOMATSU-TENMANGU SHRINE AND THE KAKEHASHI RIVER

中 川 武 夫^{*}
Takeo NAKAGAWA^{*}

ABSTRACT; The flood alleviation scheme consists of one diversion channel, four retarding basins and one dam. The measures proposed make it possible to achieve flood alleviation whilst minimising changes of the Kakehashi river, and impacts on historical environments and cultural properties. It is revealed that the preservation of Komatsu-Tenmangu shrine at the current state and location is essential, for (1) it is impossible to move the ecosystem of fauna and flora, being in harmony with the precinct buildings and spectacular sight of the shrine, without losing their qualities significantly, (2) the removal of the shrine immediately results in loss of all the personal interactions with it since the foundation in 1657, and (3) the shrine is located at an immobility point. That is, on the basis of an ancient philosophy (i.e. Inyo-Gogyo principle) that lay deep in popular mind at that time, position of the shrine was set at the water edge of the Kakehashi river, and was chosen at the distance of 600 m and in the northeast of Komatsu-castle.

KEY WORDS; flood control, integrated management, cultural property.

1. はじめに

不思議な縁から著者が国の重要文化財・小松天満宮と係わりを持たせていただくようになって以来、早いものですでに6年もの歳月が流れ去ってしまった。折しも、この歳月は小松天満宮の長い歴史の中にあつて最も苦難に満ちた時期にあたっていたのである。なぜならば、小松天満宮は昭和46年(1971)以来、建設省が立案した梯川拡幅計画⁽²⁾に基づき、その移転を迫られてきたわけであるが、この時期に移転問題が急に具体化してきたからである。

国の重要文化財が河川改修に伴って移転を迫られるという前代未聞の事態に遭遇し、心ある人々の心痛はいかばかりであつたことであろうか。まさに小松天満宮の移転問題は現代に生きる我々日本人に対して伝統文化の継承能力を厳しく問うた歴史的な事象と見ることができるのである。かかる我国の文化存亡の危機に直面して、著者は過去6年間にわたって小松天満宮と梯川に関する調査と研究に誠心誠意あたるという責務を自らに課してきた。ここに、これらの成果の一端を報告する。

本稿の主な目的は次の二つの問に答えることである。

- (1) 小松天満宮の保存と梯川水系の治水対策は両立するのか。そして
- (2) なぜ、小松天満宮を現状のまま保存する必要があるのか。

2. 梯川水系の治水対策について

結論からいえば、小松天満宮の保存と梯川水系の治水対策は決して相反する問題ではなく両者を調和さ

^{*} 金沢工業大学工学部機械システム工学科 Department of Mechanical System Engineering,
Kanazawa Institute of Technology

せることが十分に可能である。このための具体的方法がいくつも存在することが明らかとなっている。^{(1), (3)}

次に、梯川水系の治水対策のうち代表的な案を呈示し考察を加えることとする。

第1案：図1に本案の概要を示した。この案は著者が自ら実施した調査結果に基づいて提案したものであり、梯川水系の治水対策の基本を小松天満宮を迂回する新放水路の掘削に置き、ダム並びに遊水池の建設によってこれを補足するというものである。放水路ルートの中で最も望ましいものは図中点線で示されたような放水路起端を梯川と鍋谷川との合流点直上流部とし、梯川右岸堤内地を迂回し鍋谷川、八丁川並びに西川排水等からの排水を合わせ梯川と前川との合流点付近において右岸側から梯川に再流入するものである。このような放水路の掘削を基本とした水害対策を講ずる場合には少なくとも放水路起端から終端までの梯川本川河道区間については実質的に現状変更をする必要がないので小松天満宮の移転はもとより梯川の現堤防沿いに分布する旧市街地、埋蔵文化財、神社仏閣そして梯川の秀れた水際環境をそこなう程度を極限することが可能となるのである。

図2に本案の計画高水流量図を示した。なお、この計画高水流量図を作製するにあたって基準地点（小松大橋）での基本高水流量は $1700\text{ m}^3/\text{s}$ になるものと仮定されている。すなわち、まず既設の赤瀬ダムの上流にあたる大杉地区に新たにダムを建設し、 $198\text{ m}^3/\text{s}$ の洪水流量を調節する。続いて、赤瀬ダムによって $328\text{ m}^3/\text{s}$ の洪水流量を調節する。さらに、河原橋上流の左右堤内池に四つの遊水池を建設し合計 $151.5\text{ m}^3/\text{s}$ の洪水流量を調節するわけである。これよりさらに下流部においては図2中に示された流量の通水が可能となるように鍋谷川との合流点までの梯川本川の拡幅、並びに放水路の掘削によって洪水流量を調節するものである。

第2案：本案の基本的な考え方は第1案と同じであるが、本案の場合には放水路の起端をより下流の梯川と八丁川との合流点直上流部とした点が第1案との主な相違である。

第3案：本案は梯川下流域での本川拡幅工事と新放水路の掘削により洪水流量を安全に流下せしめようとするものである。本案によれば、梯川下流域全体にわたる本川拡幅工事が必要であるものの、小松天満宮周辺においては左岸側の本川拡幅を^{よしじま}葭島神社の境内地に影響を与えない範囲に留め、一方右岸側本川を拡幅する代わりに小松天満宮と正光寺との間に迂回水路を新たに掘削することで合計3つの神社仏閣の移転を回避することができる。なお、本案は宮 誠而氏により著者に直接示唆されたものである。

第4案：本案は建設省により提案されたものであり既設の赤瀬ダムおよび新設の合計7基程度のダムにより梯川上流域で合計 $700\text{ m}^3/\text{s}$ の洪水流量を調節し、その下流域では本川を拡幅することによって基準地点（小松大橋）における計画高水流量を $1,000\text{ m}^3/\text{s}$ とするものである。もし、建設省の計画に沿って本案が実行に移されれば梯川上流域における自然環境並びに生活環境が7基程度のダムの建設によって広範囲にわたって破壊されるのみならず、その下流域においても小松天満宮の移転はもとより梯川の現堤防沿いに分布する旧市街地、埋蔵文化財、神社仏閣そして水際環境に対して多大な負の影響を与えることが明らかとなっている。

3. 小松天満宮の現社地について

ここでは、小松天満宮がなぜ現社地において保存され後世に継承されていかなければならないかについて考えてみることにする。

第1番目に小松天満宮の社殿、神門といった由緒のある建造物と融合一体化している歴史的な神域内に現存する動植物生態系並びに景観の移転はこれらの質を大幅に損うことなしには不可能であるからである。著者は所用があつて昭和61年8月に小松天満宮の梅林院を訪れた。そして梅林院の縁がわにすわって青竹が密生する庭に暖かい緑色をしたささの葉を認めた時の新鮮な感動を次のような句の中に留めている。

図-1 新放水路ルートの概要図

図-2 計画高水流量図

縁がわに すわって見れば 縁かな

急速な都市化に伴って我々の周辺から失われつつある森蔽の気配を豊かに残している小松天満宮の神域はその建造物と不可分であって万代にわたり継承されていくべき貴重な遺産である。

第2番目の理由は小松天満宮は創建以来、この神社と係わりをもってきた無数の人々にとってかけがえない思い出の舞台であるからである。例えば俳人松尾芭蕉が元禄2年(1689)に連歌の名人であった小松天満宮初代別当能順を奥の細道の途上尋ねた歴史上のひとこまは小松天満宮の移転に伴って消えてしまうのである。

第3番目の理由は小松天満宮社殿はその創建者である加賀藩三代藩主前田利常公によって意図的に小松城天守閣と金沢城本丸とを結ぶ直線上で、かつ小松城天守閣から600⁽⁵⁾mにある空間上の不動点に造られているからである。

4. 小松天満宮創建の意図について

この主題については黒岩重人⁽⁴⁾と宮誠而⁽⁵⁾の両氏による秀れた研究があるので詳細は割愛する。したがって、ここでは両氏の論文をもとに利常公の小松天満宮創建の意図についてさらに考察を深めることを試みることにとする。

小松城天守閣と金沢城本丸とを結ぶ直線は東北(または西南)に向いている。したがってこの直線上にある小松天満宮は小松城の東北すなわち^{うしとら}艮の方向に位置していることになる。ところで^{うしとら}艮とは生物が死んで帰るというところであるばかりでなく、生物が生まれてくる⁽⁴⁾ところでもある。五行では^{うしとら}艮の方位に「土」が配当されている。このように^{うしとら}艮の方位は生死をつかさどる鬼神が支配する方位、すなわち鬼門として忌まれてきたのである。⁽⁴⁾古来、鬼門鎮護のために神社仏閣が建立された例は多く、小松天満宮が小松城の鬼門を守るために造られたことは明らかである。

小松城は「^{ろじょう}芦城」あるいは「浮城」と呼ばれていた。この呼び名からも容易に推察することができるように非常時には梯川の水のみならず、手取川の水までも小松城の防備のために用いられていたものと考えられている。⁽⁶⁾ところで、五行とは天地に流行してやまない木・火・土・金・水の5つの元気を意味し、相生と相剋の2つの作用がある。この相剋作用によって鬼門の土気は小松城の生命ともいべき水気を剋するのである。このために、土気を剋する木気を盛んにする必要があったわけである。実はここに小松天満宮の建立が明暦3年(1657)であったにもかかわらず、御遷官がその翌年の明暦4年(1658)2月24日にとり行われた理由が潜んでいたのである。⁽⁴⁾この御遷官の日は^{いづ}戌の年の卯の月、卯の日に対応している。⁽⁴⁾ところで、^{いづ}戌年の^{いづ}戌は十二支の支合によって卯の配偶である。また、卯は方位では東、五行では木、易卦では震すなわち⁽⁴⁾雷(天神)を意味している。^{うしとら}すなわち、木気である卯の配偶である戌年の卯の月、卯の日に天神様(木気)を水気を生命とする小松城の^{うしとら}艮の方位(土気)におまつりすることは加賀藩の祖神である天神様の木気によって小松城の生命である水気を守るために土気を剋し、鬼門を封じようとする利常公の意図があったのである。⁽⁴⁾

次に小松天満宮の社殿を多数の人員と数年の歳月をかけて造成された梯川の水辺で、小松城からちょうど600mの地点に建立した利常公の意図について考察を加えることにする。この意図を明らかにする鍵は五行の相生作用にあるものと考えられる。すなわち、五行の相生作用によれば水気は木気を生ずるのである。したがって、水気のみなき水辺の地こそ天神様の木気が盛んとなるところであるために、小松城の生命である水気を剋すおそれのある鬼門(土気)を剋するのに最適であったわけである。⁽⁶⁾このことに関連して、全国津々浦々にある天満宮がしばしば水気のみなき清流のほとりに鎮座され「水天宮」と呼ばれているのも上と同様な理由により鬼門を封じるための適地として五行の相生作用に基づいて古人がこれら

の社地を選定した結果であると推察することができよう。

一方、小松城天守閣と小松天満宮との間の距離が600mに設定された根拠を古くから伝説的に語りつがれてきた小松天満宮の北野天満宮4分の1縮造説に求めることができよう。すなわち、宮⁽⁵⁾誠而氏はこの600mという距離が京都御所と北野天満宮との間の距離2,400mのちょうど4分の1に相当しているという興味深い事実を報告している。

ところで、小松天満宮の創建当時、建物を4分の1に縮造するということはいかなる意味を有していたのであろうか。

- (1) 建物に用いられた各部材の寸法が4分の1なのか。ちなみに、この縮造法は現在飛行機などの模型を造る際に採用されている。
- (2) 建物の体積が4分の1なのか。
- (3) 建物の表面積が4分の1なのか。
- (4) 建物の各投影面積（正面図、平面図、側面図の面積）が4分の1なのか。

まず、(1)の可能性は縮造される建物の体積が原物の64分の1と小さくなりすぎるので除かれよう。(2)の可能性は縮造される建物に用いられる部材の寸法を全て原部材の寸法の4分の3乗根分の1にそろえるという煩雑な作業をこれらに対して要することから少ないものと考えられる。これに対して、(3)の場合には縮造される建物に用いられる部材の寸法を全て原部材の寸法のちょうど半分にすれば良いので作業上便利であるばかりでなく、縮造される建物の体積は原物の8分の1となり現実的である。最後の(4)の可能性は宮⁽⁵⁾誠而氏により示唆されたものであるが、小松天満宮創建当時、建物の投影面積を設計者山上善右衛門が建物の縮造の比率と直接結びつけていたがに関しては多少の疑問が残ろう。これらを総合すると著者には小松天満宮創建にあたって山上善右衛門が考えた4分の1の縮造法は縮造されるべき小松天満宮の各部材を原物である北野天満宮のちょうど半分とするものであったと考えた方がより自然であるように思われるのである。その結果として縮造された小松天満宮の表面積のみならず投影面積が北野天満宮のそれらの4分の1となるために現在用いられている模型の縮造法とは異なっているものの、我々日本人に対して感覚的により強く小松天満宮が北野天満宮の4分の1に縮造されているという印象を与えるのではないかと思う。

5. おわりに

小松天満宮の保存と梯川水系の治水対策は決して相反する問題ではなく、両者を調和させることが十分に可能である。また、小松天満宮の現社地は創建当時人々の生活に深く根をおろしていた陰陽五行説に基づいて前田利常公が定められた空間的不動点を含む聖地である。さらに、小松天満宮の現社地は今や、創建以来この神社と係わりをもってきた無数の人間と動植物の歴史を宿したかけがえのない舞台となっている。我々日本人の精神のよりどころであり、あらゆる人間の心に潤いと安らぎを与えてくれる小松天満宮を正当な理由ではなく浅慮に基づいて移転させようとしている建設省の要求は長く、そして深い伝統を有し国際的にも特異な光彩を放っている日本文化に対する著しい侮辱であって、断じてこれを排除しなければならないものと著者は確信している。

若葉萌え、露おく社 恋しけれ

参考文献

- (1) 加賀小松天満宮と梯川—小松天満宮専門調査報告書—、小松天満宮等専門調査会、昭和61年(1986)、379-451。

- (2) 梯川水系工事実施基本計画、建設省河川局、昭和46年(1971)。
- (3) Nakagawa, T., A flood alleviation of the Kakehashi basin, Japan. Regulated Rivers, 2, 1988, 187 - 193.
- (4) 黒岩重人、小松天満宮の創建について一陰陽五行の視点から一、小松天満宮だより、第2号、小松天満宮社務所、昭和62年(1987)1-9。
- (5) 宮 誠而、古文書の物語るもの、小松天満宮だより、第4号、小松天満宮社務所、昭和63年(1988)9-14。
- (6) 中川武夫、加賀・梯川水系の歴史、第6回日本土木史研究発表会論文集、昭和61年(1986)、171-175。
- (7) 中川武夫、加賀・梯川の水と小松天満宮とのかかわりに関する史的考察、第8回日本土木史研究発表会論文集、昭和61年(1986)、171-175。